

第32号 (2018年冬～2019年)

編集・発行 千葉市動物公園ボランティア

千葉市動物公園の



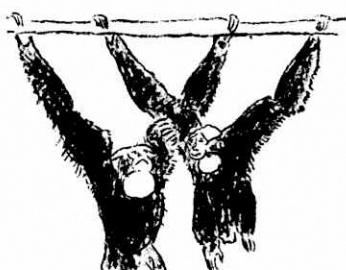
①ひびき渡る テュエット

— フクロテナガザル —

マレー半島やボルネオの森にすむ類人猿の彼ら。視界の悪い森の中で、自分の縄張りや仲間の確認のため鳴き交わします。3kmくらい届く大声の秘密は、頭と同じくらいにふくらむのど袋で、息を吸う時、吐く時、両方で声を共鳴させているからです。

メスが鳴き始めると、オスが高い声で後に続き、デュエットになります。複雑に声を使いわけ、手を口に当て声の調子を変えたりすることも。ぜひ自分の耳で聞いてみてください。

長い腕を使い、軽々と鉄棒を渡る姿は体操選手のようですね。池に手をのばし落ちた葉や花を食べることもありますが、水に入るには苦手。池に囲まれた島の中は外敵から守られて安心できるので、泳いで脱走しようとはしません。



②身を寄せ合って 寒さに耐える

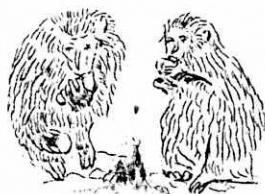
— ホンドザル —

ホンドザルは日本の本州に生息しているニホンザルです。サルの仲間の中でもっとも北に生息する種で、青森県下北半島にすむホンドザルは「北限のサル」として知られています。けれども本来、サルは寒さが苦手。冬は彼らにとってきびしい季節です。

昨年の冬、当園はサル山に暖かいたき火のプレゼントをして、ホンドザルはじょうずにあたたまってくれるか、また、大好物のサツマイモをたき火の中に入れると焼きいもをじょうずに取って食べることができる

か、観察してみました。この冬も、消防署の許可がおりれば何度も実験してみる予定です。

サル山で煙が上がっていたら行ってみてくださいね。



★ボランティアが毎月第2、第4日曜にご家族で参加できるクイズ形式の動物ガイド「ZOOボラ・クイズDEガイド」をしています。当日園内放送でお知らせしますので、ふるってご参加ください。

ボランティアがえらんだ



セブンプラス

★それぞれの動物がいる場所はウラの地図をごらんください。

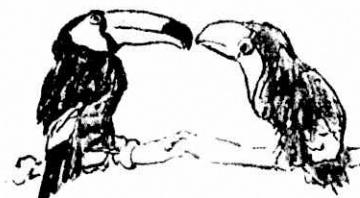
③シャワーが大好きな きれい好き

— オニオオハシ —

寒い日には動物科学館のバードホールがおすすめです。熱帯雨林のような温室で、鳥が飛び交うのが見られます。フタユビナマケモノもいます。

ひときわ目を引くのは黒い体にオレンジ色の大きなクチバシのオニオオハシ。のびのびと飛び回れて水浴びもできるこの環境が気に入ったためか、2017年秋に来たばかりのペアに5月にヒナが誕生しました。11月現在、大きさはほぼ親と同じですが、クチバシが黄色いのでまだ子どもとわかります。

野生では南米アマゾン川流域にすみ、果実、昆虫、鳥の卵やハチュウ類を食べます。当園でのエサはくだもの、ゆで卵の黄身、コオロギ、ペレットなど。ほぼ毎日2時40分ごろスコールがあり、オニオオハシが気持ちよさそうに水浴びする姿が見られます。



④当園で12年ぶりの出産

— カリフォルニアアシカ —

6月29日、カリフォルニアアシカのマリン(♀)とチャイム(♂)の間に待望の赤ちゃんが生まれました。オスで、名前はまだありません。海で生きるアシカも、わたしたちと同じ哺乳類。赤ちゃんは、お母さんのおっぱいを飲んで育ちます。マリンの初めての出産で心配もありましたが、愛情をたくさん受けて順調に成長しているようです。

ヒレのような前足を使って上手に泳ぐアシカですが、生まれてすぐはうまく泳げません。赤ちゃんも一生懸命泳ぎの練習をして、すいぶんうまく泳げるようになりました。練習中はお父さんが背中に乗せてサポートする姿も見られました。仲良し親子を、ぜひ見に来てください。よく見ると、耳たぶやかわいいしっぽもついていますよ。



⑤たくましい後ろ足で キック！ —オオカンガルー—

当園では現在、繁殖制限のためオオカンガルーはオスとメスを分けて飼育しています。のんびり暮らしているメスにくらべ、オスはメスが気になって仕方ない様子。しきりにメスの動きに注目し、時々誘うような声を出します。

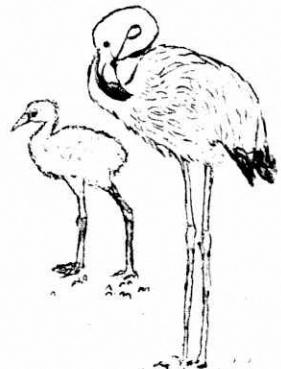
オスは群れの中の序列を確認するため、キックボクシングのような小競り合いをくり返します。真剣な戦いにはならず、弱い方が声を出したらそれで終わり。



「降参！」と言っているのでしょうか。始終あちこち体をかいっていますが、かゆいだけではないらしく、戦う前に両者向き合って反り返りながらおなかをポリポリやることなどもあり、動作は人に似ているのに意味不明。なんとも不思議なカンガルーのコミュニケーションです。

⑥ミルクを与える父の愛 —ベニイロフラミンゴ—

8月21日、ベニイロフラミンゴのヒナが生まれました。フラミンゴの夫婦はとても仲が良く、協力して卵を温めます。そしてようやく生まれた赤ちゃん。羽の色は白で、ピンクになるには少し時間が必要です。ヒナは両親から出てくる栄養豊富なミルクで育ちます。お父さんからもミルクが出るなんて不思議ですね。フラミンゴミルクと呼ばれ、のどの奥からクチバシを伝って出てくるので、ほにゅう類のオッパイとはちがいます。このミルクの中には羽がピンクになる成分も入っていて、だんだん色が変化していきます。10月現在、ヒナはまだグレーがかかった白です。ピンクになるのはいつなのか？みなさんもやさしく見守ってあげてください。



★ふだんはジッとしている動物も、食事のときは活発に動きますし、何をどんなふうに食べるのか、意外な発見があるかも。「食事時間のお知らせ」の園内放送がきいたら、行ってごらんになることをおすすめします。飼育係さんに質問できるチャンスもあります。

★それぞれの動物が見られる場所は下の地図をご覧ください。

⑦日本のカメを絶滅から守ろう —ニホンイシガメ—

子ども動物園ではイシガメの保全活動に取り組んでいます。30年8月生れの子ガメ7頭は甲の直径が3cm強で、黄色っぽくカラフルな姿。29年生れの子ガメ5頭は2倍くらいの大きさになりました。2年続けて子ガメが生まれ、これからも順調な繁殖が期待されます。

しかし、野生復帰はかんたんではありません。帰るべき川には外来種であるクサガメが多く、交雑してしまうのでイシガメの遺伝子を守れないうえ、アライグマに食べられる危険も高いのです。自然の中でイシガメが暮らせる場所を確保し、保護しながら増やしていくのが当面の目標となるそうです。



イシガメは昔話や浮世絵にも描かれる身近な生き物です。イシガメを守ることは生物多様性を維持するだけでなく、日本の伝統文化を守ることにもつながります。イシガメ保全活動は、トキやコウノトリの保全にも匹敵する大切な事業なのです。

★「絵本のおはなし会」が毎週土曜 11:30より動物科学館2階図書室で開かれます。小さいお子さんはぜひどうぞ。

2020年にチーターとハイエナを迎えるため、展示場を準備しています
お楽しみに！

